

神西清とプーシキン ―翻訳家の散文精神―*

小林 実**

はじめに

かつて私は、昭和11～12年（1936－37）の改造社版『プーシキン全集』（全五巻）の刊行によって、日本のプーシキン受容が本格化したことを論じた⁽¹⁾。

この全集の刊行は、プーシキン没後100忌年を記念するイベントが、本国ロシア（ソ連）で執り行われることをうけて企画された。翻訳にたずさわったのは、中山省三郎をはじめとする新進の若者たちであり、やがて彼らが時代を代表するロシア文学者となることを考えても、本全集の刊行がロシア文学受容の重要な指標であることはまちがいない。

詩人アレクサンドル・プーシキンの名は、ロシア近代文学の父という文学史的な意義ばかりでなく、今もなお多くのロシア人にとって特別な感慨をもって受け入れられていることは、ロシアに関心をもつ者の間では常識である。そしてそれが異邦人には理解しにくいということも、よく言われることである。

ロシア文学者の木村浩も、次のように述べている。

およそロシア文学といわず文化一般について語る場合、プーシキンを避けて通ることができないことは当然である。いや、このような但し書きをすることすら不自然である。プーシキンはロシア文学そのものである、というあくなき主張は、ロシア人によって書かれたロシア文学の案内書を少しでも読んだことのある人なら熟知しているはずである……。

それにしても、私はプーシキンについてこのような文章を書かねばならぬことが憂鬱である。これは今やプーシキンについて書くときの、異邦人研究者の一つの儀礼とさえなっている観があるからである。あるいは、次のようなお決まりの弁明もすぐ浮かんでくる。

……わが国ではロシア文学が外国文学のなかでも特に親しまれ、トルストイ、ドストエフスキー、チェーホフなどの文学は自国の文学にもまして愛読されているが、彼らの唯一絶対の師たるプーシキンになると、その知名度は極端に低下する。〈私はロシア文学が好きだ〉と称する人でも、プーシキンの作品を読んでいない場合も珍しくない……云々⁽²⁾。

（『ロシアの美的世界』）

* Kiyoshi Jinzai and A.S.Pushkin : On the problem of Japanese prose

** Minoru Kobayashi 十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科(Department of Culture and Communication)

キーワード：ロシア文学 フランス文学 ロマネスク 日本語改良問題

これは日本ばかりのはなしではない。フローベールがツルゲーネフにむかって、君の国の大詩人は意外と平凡だと語ったことはよく知られる。また、20世紀初頭の英国のロシア文学紹介者として知られるモーリス・ベアリングが、その著*An Outline of Russian Literature*において、『イギリスではプーシキンの完璧な翻訳が存在しない。これはあたかもロシアにシェイクスピアやミルトンの完璧な翻訳がないといっているようなものである。私は決してプーシキンがシェイクスピアやミルトンに匹敵する詩聖だと言うつもりはないが、しかし彼こそロシアのすべての作家のなかで最も国民的かつ重要な作家だと言っておきたい。』⁽³⁾と書いている。ロシアとそれ以外の国々では、プーシキンに対する思い入れの温度差が、かように隔たっているのである。

ということならば、逆にプーシキンをどれだけ理解しているかということが、すなわちロシア文化をどれだけ理解しているかということになるのではないか。プーシキン受容の様子が、そのままロシア文化受容の指標となるのではないかと、私は考える。

ところで先の文章のなかで木村浩は、プーシキンが理解されにくいのは、彼のロシア語の美しさが問題だからであって、それゆえ異邦人にとっては永遠の謎を秘めた存在であり続けるのではないかと述べている。これは多くの人びとが今でも主張するところでもある。

しかし、詩の翻訳が不可能であることは重々承知したうえで、それでも言語の壁を越えて詩が愛される例がないわけではないことを考えると、詩人だから理解しにくいというのは、事情の半分しか説明していないのではないだろうか。たとえば日本では上田敏が訳したカール・ブッセの「山のあなた」が国語教科書に採用されたことで、ドイツ本国よりも知られることになったし、堀口大學の『月下の一群』が口語詩のモデルとなることでフランス近代詩を広めた功績は、だれもが認めるところであろう。

そう考えると、たとえプーシキンを原語で味読することは不可能であっても、その翻訳を味読することはできるはずである。もちろんそれは、もはやプーシキンのテキストではないのかもしれないが、翻訳文学の在り方とは、元来そういうものではないだろうか。そしてわれわれは、翻訳者の努力が、原語から読み取れる味わいを、いかに自分の言葉で表現しなおすかという点に向けられているのだということを、いまいちど思い起こさなければならない。つまり、翻訳者は内容を移すだけでなく、それを表す言葉と向き合っているのであって、真摯な翻訳家ほど、自分の言葉を問題化しているはずである。そしてあとは、周囲がそれを取り上げるか否かの問題である。

ロシア文化受容の指標としての改造社版『プーシキン全集』に携わった訳者のひとりに、神西清がいる。神西といえば、名うての翻訳家として知られる。戦後は「鉢の木会」の一員であり、鎌倉文士のひとりでもあった。プーシキンやチェーホフ、ツルゲーネフの名訳を残しており、今でもそれらは岩波文庫や新潮文庫で“現役”として売られている。

またその文章へのこだわりも、半ば伝説と化して語られることが多い。弟子の池田健太郎は、次のように述懐している。

さて、神西さんは、ウイスキーの角瓶に入れた日本酒をコップに注ぎ、長いパイプを心持ち上向きにくわえながら、特徴のある、おおらかな美しい書体で、私の原稿を直しはじめ

た。原書をゆっくり読んで、原稿を見て、それからしばらく空を睨んで、素早く訂正する。その姿には、何か画家に似た芸術味があった。時どき、原書の情景を、手ぶり身ぶりで実演して見せ、一ぱんの確にその情景を伝える表現を探しておられた。私が驚きもし感嘆もしたのは、一行訂正するたびに、半ページ前、一ページ前から何度も読み直し、目ざわりな言葉はないか、文意はつながるか、文章の呼吸や勢いに狂いはないかと、繰り返し確認されて行く綿密さであった。「残念がる」という私の訳語は、そうした綿密な性能試験の結果、「後悔のほぞを噛む」と訂正された。「醜聞^{スキャンダル}を呼び起こした」は、「物議をかました」と改められた。こうした翻訳の態度と呼吸をひと切れも逃がすまいと、私は全神経を張りつめていた。「あとはこういう要領で直し給え」――二時間ほどして釈放された時、私は顔が青ざめるほど疲れていた。心は興奮していた。文章は生き物だ。――何度、私はつぶやいたことだろう。¹

(「翻訳仕事から」)

これだけのこだわりが伝えられる神西清が、いったいどのようにプーシキンに取り組んでいたのか。またそれは時代背景とどうかかわっているのか。

「近代日本におけるプーシキン受容史」の一齣として、いまいちど神西の業績を見直してみようと思ふ次第である。

1 プーシキンに取り組むまで

周知のように、神西清といえばフランス文学にも造詣の深いロシア文学者だった。

当初建築家をめざして第一高等学校理科甲類に入学したが、寮生活で堀辰雄と出会い、学業を抛って語学とフランス文学の研究に没頭した。やがて文学熱が高じて一高を退学し、東京外国語学校露語部文科に再入学する。ロシア文学への関心によることは明らかであろう。

同校で八杉貞利に師事しながら露語の研鑽を積むとともに、同人誌『虹』にヴォローシンの詩「エネチア」(『虹』1927年5月)と、ヴァチェスラフ・イワーノフの評論「薔薇と十字架、アレクサンドル・プロコフの芸術」(『虹』1927年11月)を翻訳発表している。

昭和3年(1928)3月に外国語学校を卒業するが、しばらくは、若手の仏文学者としてマルセル・ブルーストやアンドレ・ジイドに関する翻訳や批評を発表し続ける。

ロシア文学に言及するのは、昭和7年(1932)9月『日本現代文章講座』第七卷(厚生閣)に「ドストエーフスキイと文学的方法」を掲載されたのが初めだが、『高度に動的な劇的要素に貫かれた彼のスタイルは、例へばブルーストのスタイルを内観的印象主義と呼ぶ同じ意味から、「内観的表現主義」とも称することが出来よう。』⁽⁴⁾ というように、あくまで仏文学者の眼でドストエーフスキーを論じるというものであった。

ようやく露文学者としての仕事をこなすようになるのは、翌8年(1933)からである。

¹ 『近代文学鑑賞講座』21巻月報、角川書店、1961年(引用は『オネーギン』岩波文庫、1962年5月、2006年9月改版、pp.212-213より孫引き)。

この年はちょうどツルゲーネフ没後50忌年にあたっており、「『散文詩』の完訳」（『作品』4月）、「ツルゲーネフ序説」（岩波講座『世界文学』第五巻、4月）、「露文学史上のツルゲーネフ」（『セルバン』8月）、岩波文庫『散文詩』（12月）と、ツルゲーネフ関連の評論および翻訳をこなしている。

また年末から『カラマーゾフの兄弟』のうち「スタヴロギンの告白」を翻訳連載し（『作品』1933年12月～1934年4月）、さらにチェーホフ没後30忌年にあたる昭和9年（1934）には、「チェーホフの音楽性について」（『新潮』3月）、「闘へるチェーホフに就いて」（『行動』3月）、「チェーホフの医学史」（『作品』8月）、翻訳『チェーホフの手帳』（芝書店、12月）と、その後の業績につながる取り組みをおこなっている。

プーシキンと関わり出すのも、ちょうどこの頃からである。

岩波文庫『スベードの女王』（「ピョートル大帝の黒奴」も併載）が昭和8年（1933）8月に刊行される。企画と神西への依頼に関する経緯は不明であるが、彼にとっては、これがプーシキンと取り組む最初の機会となった。

さらに翌年、雑誌『文芸』5月に評論「プーシキンの精神」が載る。同じ号には中山省三郎の「プーシキン第一課——プーシキンの意義について」が掲載されている。

その中山を中心にすえて改造社が企画出版したのが、はじめにふれた『プーシキン全集』である。昭和10年（1935）神西の日記に、《9月26日（木）〔…〕来信、改造社大島治悟、「プーシキン選集」の件。》⁽⁵⁾とあるのが、おそらく最初の『全集』がらみの記事だとすると、同年秋頃から本格的に作業に入ったものと思われる。

ちなみに改造社版全集での翻訳分担は次のとおりである（刊行順）。

【第2巻】昭和11年（1936）10月

「エヴゲニイ・オネエギン」中山省三郎訳

「流浪の民（ジプシイ）」中山省三郎訳

【第3巻】昭和11年（1936）11月

「ペールキン物語」神西清訳

・「葬儀屋」「駅長」「賈百姓娘」「その一発」「吹雪」

「ドゥブローフスキイ」神西清訳

「スベードの女王」中山省三郎訳

「大尉の娘」神西清訳

【第4巻】昭和11年（1936）12月

「ボリス・ゴドゥノフ」上田進訳

「ファウストの一場面」米川正夫訳

「客齋の騎士」米川正夫訳

「モッツァルトとサリエーリ」中山省三郎訳

「石の客」上田進訳

「死の酒もり」 米川正夫訳
 「水の精」 米川正夫訳
 「ピョートル大帝の黒奴」 中山省三郎訳
 「ゴリューヒノ村史話」 神西清訳

【第1巻】 昭和12年（1937）1月

「抒情詩（抄）」 中山省三郎訳
 「コーカサスの俘虜」 上田進訳
 「盗賊の兄弟」 上田進訳
 「バフチサライの泉」 中山省三郎訳
 「ヌーリン伯」 神西清訳
 「ポルタワ」 上田進訳
 「コロムナの家」 神西清訳
 「青銅の騎士」 中山省三郎訳
 「キルジャーリ」 神西清訳
 「書簡体小説の断片」 神西清訳
 「ロスラーヴレフ」 神西清訳
 「客は***家の別荘に…」 神西清訳
 「埃及の夜々」 神西清訳

【第5巻】 昭和12年（1937）2月

「ルスランとリュドミラ」 外村史郎訳
 「西部スラブの歌（抄）」 外村史郎訳
 「サルタン王物語」 平井肇訳
 「死せる王女と七人の勇士」 平井肇訳
 「黄金の鶏」 平井肇訳
 「漁師と魚の話」 平井肇訳
 「和尚と下男バルダの話」 平井肇訳
 「随筆 抄」 外村史郎訳
 「日記 抄」 外村史郎訳
 「書簡 抄」 外村史郎訳

2 『プーシキン遺珠』

この全集刊行から10年後（すなわちプーシキン没後110忌年）の昭和22年（1947）12月、創藝社より『プーシキン遺珠』が刊行される。内容は「ピョートル大帝の黒奴」「ロスラーヴレフ」「書簡体小説の断章」「別荘の客」「エジプトの夜々」さらにプロスペル・メリメによる「プーシキン論」という構成であり、メリメの文章のみが初訳である以外は、すべて既訳のものが利

用されている。

ここにメリメの評論が掲載されているところに、神西の面目躍如たる点がうかがえよう。日本では一般的に「カルメン」の作者として知られているメリメであるが、フランスで初めてプーシキン^{プーシキン}を翻訳紹介したことで知られている。

この評論では、まずロシア語の文章語改良からはじまり、「ルスランとリュドミラ」「コーカサスの俘虜」「コロムナの家」「ヌーリン伯」「流浪の民」といった物語詩を論じ、戯曲「ボリス・ゴドゥノフ」と韻文小説「エフゲーニイ・オネーギン」の解説、最後に物語詩「毒の樹」^{アンチャール}「預言者」を語るという内容で、詩人としてのプーシキンが紹介されている。

散文については、《プーシキンには散文の作品も幾つかある。まづ小説には、なかなか見ごたなものが多く、例へば『大尉の娘』とか『スペードの女王』などがそれである。また夥しい文芸評論があり、更にブガチョフの乱に関する一篇の史論もある》と書かれているばかりで、いささか素っ気ない。メリメといえは『スペードの女王』の仏訳で評判を取っているが、この論では、あくまでプーシキンの本質は詩人であるという点を強調しているわけである。わざわざこのメリメの文章を入れた点に、詩人の手になる散文として、収録作品を理解させようという神西の思惑が明瞭であろう。

本書に掲載されているプーシキンの作品は、いずれも未完成のものばかりを集めている。いわば再現困難な詩に近づくべく、散文の手前を選んできたと考えることができるのである。本書の「あとがき」で神西自身はそれを「熔岩の美」に譬えている。

幸か不幸か、プーシキンには少なからぬ散文の作がある。それは謂はば、粘度が高いためにいち早く凝固した熔岩塔のごときものである。それは決して、普通に考へられてゐるやうに詩人の余戯などではない。時として詩人の野心は、それらの散文作品のうちに却つて烈しく燃えてゐるかも知れない。〔…〕

この訳本には彼の散文作品のうちから、主として未完成に終つてゐる重要作を拾ひ集めてみた。これはもう一ぺん熔岩の譬へにひき当てれば、無定形のまま凝固するにいたつた粘度の低い溶岩流にぞくする。それなりにまた、ここには詩の原動力が、とつぜん停止した瞬間のすがたのままで、永遠に刻みつけられてゐるのである。〔…〕そこにはプーシキンの創作活動における詩の力と散文の抵抗とが、なまなましい格闘のすがたをとどめてゐる。⁽⁶⁾

本書収録作品のうち、とくに興味深いのが「エジプトの夜々」であろう。作中、イタリア人の即興詩人が歌った詩が掲載されており、語り手（作者）はそれをイタリア語のわからない読者のために翻訳して紹介している。《次に掲げるのは、チャールスキイの記憶に残つたその文句にもとづいて、私達の仲間の一人が試みた自由詩である。》⁽⁷⁾

これはプーシキン自身がイタリア詩を翻訳したという体裁であり、到達不可能な原詩の趣を、翻訳の努力によってなんとか伝えようとしているその箇所に、プーシキンが登場人物に仮託して描いた翻訳の苦労と実験と、さらにはそれがそのまま、翻訳者としての神西の努力として読むことができる。

つまり詩と散文のはざまにある作品をあつめた本書は、散文とはなにか、という根本テーマ

を、編訳者の神西が読者に問いかけているものとして理解することができるのである。

3 『プーシキン短篇集』と『莊園ものがたり』

『プーシキン遺珠』から四ヶ月後、昭和23年（1948）4月に角川書店から『プーシキン短篇集』が出る。収録作品は「スペードの女王」および「ベールキン物語」である。いずれも岩波文庫の既訳からの再録である。

神西は、『プーシキン短篇集』に寄せた解説「短篇六種の発生について」で、二つの収録作品を、それぞれの同時期に制作された韻文作品との関連によって説明している。

たとえば「ベールキン物語」は、〈ボルジノの秋〉とよばれるプーシキン多作の期間に制作された短篇集であるが、これを同時期の詩劇（「吝嗇の騎士」「モーツァルトとサリエリ」「石の客」「コレラ病さなかの酒もり」）や抒情詩と関連づけ、詩人としての成熟の余勢から生まれた散文作品という位置づけがなされる。

さて『ベールキン物語』五篇は、前にも見たやうに四つの小悲劇の成立する直前に書かれてゐる。しかも詩人の内部におけるそれらの意想の発生・生成・成熟などの過程について云へば、この二群の作品の互ひに深く交渉してゐることは、おそらくわれわれの想像の上にあるであらう。事実、よしんば日附の上の順序はいかにともあれ、『ベールキン物語』の各篇を、同じ秋に書かれた韻文の諸作品に対比しつつ眺めるとき、一つの動かすべからざる、そしてかなり興味ある事実気づかざるを得ない。それは、詩人が成熟の余勢を駆って散文の世界へ降りて行つて、人間の日常性のうちに新鮮な感興を求めようとしたその成果が、すなはちこれら五篇の物語であつたといふことである。⁽⁸⁾

（「短篇六種の発生について」）

また「スペードの女王」についても、同時期に書かれた抒情詩のテーマが、形を変えて散文小説「スペードの女王」と韻文叙事詩「青銅の騎士」とに、それぞれ反映しているとみることで、韻文から散文へと移行する詩人の創作動機に迫っている。

すなわち、「ベールキン物語」にしても「スペードの女王」にしても、高い完成度にもかかわらず、あくまで詩から発生した余技であるということが強調されているのである。

そのことは、同じく昭和23年（1948）4月に世界文学社から刊行された、『莊園ものがたり』についても説明されている。

詩人アレクサンドル・プーシキンにおける散文作品の意義を、多少とも厳密に論ずるとすれば、それはあくまで副次的なものと言はなくてはならない。現に詩人みづからも、さう考へてゐたことは、例へば一八二七年の夏、最初の野心的な散文小説『ピョートル大帝の黒奴』（これは未完に終つてゐるが――）を書きはじめた頃の手紙に、「感興がまだ沸かないから、とりあえず散文にとりかかつた」（友人デリヴィグ宛）と記してゐるところなどから、たやすく察しのつくことであらう。彼はあくまで韻律をはなれては、七絃琴を手に

とらずには、ものを考へることのできない純粹な詩人であつたし、また、さうあるべき人であつた。このことは、何度くり返してもくり返しすぎることはない、きびしい真理であつた。⁽⁹⁾

(「あとがき」)

『莊園ものがたり』の収録作品は、「ドゥブロフスキ」「ヌーリン伯」「キルジャーリ」「ゴリューヒノ村史話」の四篇で、いずれも改造社版全集に収録されていたものからなる。

神西によれば、プーシキンの散文は、《純粹にロマネスクな興味を主軸とする明快かつ清新な説話の追求》と《フォークロア的ないし農村史的な関心から発して、しだいに大きく歴史の世界へ伸びてゆく動き》⁽¹⁰⁾ の二つの系列がみられるという。

そのうち本書では、それまでの二冊(『プーシキン遺珠』『プーシキン短篇集』)に収録されていない作品のうちから、後者の系列のものが選定された。(のちに農民反乱につながる農村史的主題が連想されたのか、同年12月に『俠盜記』と改題されている。⁽¹¹⁾)

つまり『プーシキン短篇集』と『莊園ものがたり』は、それじたいが、神西がいうところの二つの系列に、それぞれ対応しており、複数の出版社から刊行するにあたって、単純に性質の異なるものを振り分けたのであろう。

ただその分類はあくまで形式的なものであって、いずれも神西のこだわりが、詩と散文のはざまにあったということは、このようにそれぞれの解説文に明白で、やはり『プーシキン遺珠』と問題意識を共有していることがわかる。

4 敗戦と散文の運命

神西のプーシキン翻訳が単行本のかたちで出版されたのは、昭和22～23年(1947-48)であるが、なぜその時期に詩と散文のあり方にこだわっていたのか。どうやら敗戦直後の人心の荒廃が背景にあったようである。

このごろは妙に詩に飢ゑてゐる。わたしはあまり都会へ出ない。昔は別荘地であつたこの小さな町の奥に引込んでゐれば、焼跡の復興のさまも目にふれることがない。花木の多いこの庭には、緋桃や真白な梨の花の散つたあとに、そろそろ紫木蓮や牡丹が、支那風の美しい花鳥図をくり展げようとしてゐる。去年の今ごろは、庭の面を泳ぐやうに流れ過ぎる、おびただしい野禽の群ばかり目について、花の色はつひぞ目に入らなかつた。今年は、目にはどうやら入りながら、それが心にまで沁みて来ない。やはり、心が荒廃してゐるのである。来年は果してどうであらうか。……疑ひもなくわたしたちは、記念すべき過渡期に生きてゐるのだ。⁽¹²⁾

(「詩と小説のあひだ——読書日記抄」『文芸』昭和21年6・7月合併号、傍線引用者)

敗戦の報に触れてのち、神西は鎌倉にこもって文筆業に専念する。その書きならしであろうか、読書日記を記して、それを雑誌に掲載したものである。その冒頭、傍線を付したように

《このごろは妙に詩に飢えてゐる》という印象的な言葉が綴られている。

彼にとって「詩」とは何をいうのか。花の色は目に入るものの、《それが心にまで沁みて来ない》という。つまり風物にふれて感興が湧くような体験を「詩」というのであろうか。

彼は次のようにも書いている。

「三四十年以前の東京にあつては、作者の情緒と現実の生活との間に、今日では想像のできない美妙なる調和があつた……」とある数行が目にとまつた。この調和がすなはち、一葉、柳浪、鏡花などの名作を成さしめたと云ふのである。鷗外が普請中と名づけた時代より、一時代前のはなしであるが、尤も鷗外のやうなきびしい眼の人に言はせれば、その時代も既に普請中であつたのかも知れない。⁽¹³⁾

(同、傍線引用者)

花の色が目に入って心に沁みることと、ここでいう「調和」の感覚は同じことを述べているのだらうと理解できる。興味深いのは、傍線を付した箇所にあるように、その「調和」は明治28、9年頃(1895-96)にはあったとされているということと、挙げられている名から、詩人ではなく散文作家(の文章)にそのモデルが求められていることである。神西のいう「詩」とは、形式としての韻文ではなく、その精神の態をさしていると解釈したほうがよいようである。少しあとでは次のようにも述べている。

今日わが国の詩の不振を人はよく言ふが、それは半ばは当り、半ばは当つてゐない。いはゆる心境小説なるわが国独特のジャンルが、立派に代用をつとめて、読者の詩的渴望をみたすとともに、本来の詩の舞台を奪つてゐるからである。事実、心境小説の或るものは、殆ど純粋な散文詩にまで磨きあげられてゐる。⁽¹⁴⁾

(同)

どうやら神西にとっての「詩」の問題とは、じつは散文の問題なのではないかということが、この文章からわかるのである。もちろん、ここでいう「詩」とはすでに韻文という形式のことではないので、「詩の問題」であってもよいかもしれないが、やはりこだわりの核心は詩的調和をもつ散文の在り方にあると理解するべきかと思う。それが一葉や鏡花の文章であり、あるいは心境小説の文章に言及する理由になる。

また、神西は「詩」あるいは散文について議論を深めていく際に、ジャック・シャルドンヌを引き合いに出す。ちょうどこの文章が発表された三ヶ月後、神西が翻訳したシャルドンヌの『ロマネスク』が単行本として青磁社から刊行されている(昭和21年10月)が、彼がこの時期もっとも意識していたのは、このフランス作家であつたようだ。

人は人との反映のなかに息づき、交流のなかに生きる。人間生活とは、隣人のうちに光と智慧を摂取し消化する営みにほかならない。そして小説とは、私小説とは、そのやうな音幅をもつた本当の人間に寄せられた「至高の愛」の表白、「至高の信頼」のすがたなの

だ。シャルドンヌが地味にこつこつ書きつけてゐる夫婦小説の秘密もまた、よその場所にはあり得ない。

今年に入つて、シャルドンヌは再びわたしの座右の書になつた。荒廢がわたしに、この作家を新しい眼で顧みさせたのである。最近の日本人は変つた。わたしたちはいきなり精神人の仮着をぬぎすて、いきなり物質人の、經濟人の仮着を身にまとつた。学者は右の抽斗に鍵をかけて、左の抽斗を氣ぜはしく搔きまはしはじめた。そこには、空間的なあざやかな振幅のあらはれはあつても、精神の肉体的な音幅の深まりはない。敗戦の教訓は無駄であつた。さうである限り、この荒廢はまだまだ永くつづく。わたしは觀念の眼をとちた。その眼底に浮びあがつてきたのが、このシャルドンヌだつたのである。⁽¹⁵⁾

(同)

敗戦直後の「荒廢」によって、花の色に心を動かす「調和」を失つたように、日本人は《隣人のうちに光と智慧を攝取し消化する営み》も失ってしまった。そしてその渴きを充たす希望がシャルドンヌの小説だったということである。では、それはどのような作品なのだろうか。

刊行された『ロマネスク』の「あとがき」に、神西は次のように書いている。

この作品は、卒読をたのしむといった作品に属しない。筋を追つたり、展開に胸をおどらせたり、或ひはあらはな思想を汲みとつたりするのにふさはしい作品でもない。たびたび繰り返して嘔みしめるにつれて、こちらの目が次第に肥えて、美しい含蓄が少しづつあらはれて来、だんだん味はいを増してゆくといった性質の作品である。⁽¹⁶⁾

その文章は、読み流したり読み飛ばすことを許さない文章であることが分かるとともに、《たびたび繰り返して嘔みしめる》ような時間の堆積を必要とする読書経験をもとめていることがうかがえる。彼の翻訳がそのようなになっているかどうかは、読者それぞれが判断するところであるが、少なくともフランス語の原文を読む神西にとってシャルドンヌの文章は、そうした《精神の肉体的な音幅の深まり》を感じさせる読書経験をもたらすものだったのであろう。

ところで戦後の神西は、先にも述べたように、文筆家として専念する生活をおくりはじめる。すでに戦時中も単行本『短篇集 垂水』(山本書店、1942年9月)を出し、作家としての道を歩みだしていたが、いよいよそれを専業とすることになる。読書人としてばかりでなく、作家としても時代状況と向き合うことになったのである。

小説は散文で書かれる。当たり前なことである。だがこの当り前のことを、われわれは本当に知つてゐるだらうか。散文といふこと、散文の実体といふものについて、考へてみたことがあるだらうか。

思ひうかぶまに一つ二つ例をひく。フランスの現代作家シャルドンヌに、次のやうな言葉がある。「愛についての或る觀念は、洗練された文明の証拠だ。それは名誉観や、美しい散文と同じく。」……ここに言はれてゐるやうな意味で、われわれは曾て散文といふものを考へたことがあつたであらうか。

同じく現代フランスの批評家アンドレ・ルソーに、次のやうな不思議な言葉がある。「フランスの散文——この、詩にとつての見忘れられたる源泉。」……つまり、詩が恩知らずにも自分の源泉であることを忘れてゐるところの散文、といふほどの意味だが、このやうな高さで散文といふものを考へたことが、曾てわれわれにはあるだらうか。

美しい散文といふこと、詩の源泉でさへあると言はれる散文といふもの、これは一たい何者だらうか。散文の美しさではない。美しい散文といふ、つきつめた、本質の問題である。⁽¹⁷⁾

(「散文の運命」『人間』昭和21年9月、傍点原文)

昭和21年(1946)といえ、志賀直哉が例の「国語問題」を雑誌『改造』4月号に発表して、日本語を廃止してフランス語を採用すべき旨を主張したことで知られるように、国語改良や漢字廃止の是非が問題となった頃にあたる。11月には当用漢字および現代かなづかいの実施が内閣により告示・訓令されている。この時期の国語改良問題に関して詳細を論じる余裕はここにはないが、神西の問題意識も、この時代背景に触れているであろうことは容易に察しがつく。

いうなれば、敗戦を機に、明治維新以後の近代化について、もう一度見直そうという機運が、知識人のあいだで高まった時代である。神西の場合、それは近代日本の散文の在り方にたいする反省というかたちで表れた。

わたしはこれを、明治のわが国語改革の運動に思ひ合はせてみる。あの頃は二葉亭もゐた、逍遙もゐた、鷗外も漱石もゐた。役者が揃つてゐなかつたのではない。この四人だけでも、みんな西洋の近代文学にちかに道をたづねた人々であつた。そこで散文といふものがどのやうに省察されてゐたか。それとも何かほかの事に気をとられて、そこまでは手が廻り兼ねたのか。くはしい事情は明治文学の研究者に聞いてみないと分らないが、結果から見ればどうやら失敗であつたらしい。現にわれわれの手に伝えられてゐる国語の蕪雑なすがたを見て、さう言ふのである。⁽¹⁸⁾

(同)

いかにも神西らしく、近代散文の成立を西洋文化の輸入過程から論じており、しかも彼の議論は、シャルドンヌやアンドレ・ルソーといったフランス文化の教養の上に立脚している。ここに露文学の教養が加われば、おのずとプーシキンによる近代文章語成立の試みが発想されるだろう。神西は次のように露文学と仏文学の教養をからめてくる。

[...] ヴァーゼムスキー公爵は、バンジャマン・コンスタンの『アドルフ』の露訳をした。プーシキンはこの友人の練達にして精彩ある筆が、コンスタンの「調和あり社交的で、屢々靈感にみちた形而上的言語」を、如何に征服してゆくかを注視した。このロシヤ散文の夜明けにあたつて、役者も揃ひ、散文といふものの本質への反省も、まづ十分に深かつたことが察せられる。⁽¹⁹⁾

(同)

5 散文精神とロマネスク

ところで戦後の神西の業績は、プーシキンの翻訳が既訳を再編・再研磨したものであったように、戦前にすでになされたものを掘り起こすようにして、それを深めている節がみられる。

「散文の運命」においても、《今から十二年ほど前、わが文壇ではアランの散文論が流行を極めたことがあつた。そのときジャーナリズムの上で、どれほど華々しい或ひは深遠な議論が闘はされたか、無精なわたしは切抜も持たず今ではあらかた忘れてしまつたが、折角のその気運もさして著しい養分を醸し出すに至らなかつたことは、やはり今日のわが散文の有様を見れば察しのつくことである。》⁽²⁰⁾ という言及がみえる。

十二年ほど前という、昭和9年(1934)にあたり、それはちょうど彼がプーシキンに関する論考をまとめた「プーシキンの精神」(『文芸』5月)が発表された年でもある。

文学史的な話題でいえば、《昭和一〇年前後のプロ文運動の崩壊といわゆる「転向」の風潮の中で、階級的観点を失っても現実への関心は失うまいとする文学者の間で散文精神が説かれ、それを指導精神とする「人民文庫」が創刊(昭和一一・三)された》(亀井秀雄)⁽²¹⁾ という時期に近接する。アランの散文論は、桑原武夫が昭和8年に雑誌『作品』に訳出連載した「芸術論集」をさす。桑原自身の証言に曰く、《第十卷「散文について」が訳了されると、作品社のすすめで、それに二、三の短章を加えたものを『散文論』と題して九十九ページの小冊子として同年末に刊行した。これの好評に支えられて『芸術論集』の他の巻をそれぞれ適当な雑誌に訳載してゆき、その完訳本が岩波書店から刊行されたのは、戦雲が重く近づいてきた一九四一(昭和十六)年の五月であった。》⁽²²⁾

仏文学徒のあいだで起きたアランのブームと、左翼青年たちのあいだで起きた「散文精神」の問題とがからみ合う時期に、神西はプーシキンに触れていたことがわかる。

しかし、彼自身が告白しているように、アランの散文論について、そのときはさほど真剣に付き合っていないようである。というのも、そのプーシキン評を読めば、前時代的なアリズム観をなぞっているに過ぎず、プーシキンの散文制作についてまったく触れていないことが明らかであるからである。

……………何事ぞ

マゼッパの身を揺する驚駭は？

今みる人気ない牆のうち

その館、また荒果てた庭

はた、曠野に口あく表扉が

忘れた物語の一齣を

彼の胸に落したのか？

淡々として流れ出す彼の素朴な詩句は、しかし非常に屢々この「一枚の扉」をひそめてゐる。否、一筆書きの何気ない井を匿してゐる。そして彼の浪漫性は常にかかる井によつて、深いレテリアに真直に足を涵すのだ。彼の中期以後の作品のうち、特にロマンティックな香気の強くするものを探つて見れば、きつと彼のこの側の名人芸を見出すことが容易だ

らう。⁽²³⁾

(「プーシキンの精神」)

また試みに、前年の昭和8年(1933)8月に刊行された岩波文庫版『スペードの女王 他一篇』解題をみると、もちろん散文家としてのプーシキンの意義は詳しく述べられているが、後年問題とするような散文のもつ詩情や、文章語における散文の在り方に関する本質的な議論はみとめられない。桑原のアランが紹介される前の段階での、神西のプーシキンの散文解釈は、修辭的な抑揚が回避されたものというほどの理解にとどまっている。《彼の散文の一つの特徴である句の均齊は、明かにカラムジンから承継いだものだが、同時に力めて「散文性」を厳守しようとし、修辭学的な抑揚から奇蹟的に免れてゐる所に彼の全く別種の努力があり覚悟がある。》⁽²⁴⁾

だが、四年後になると、いささか態度に変化が見られる。

僕がいまかなり我儘に、文学史的な価値づけを寧ろ無視して、初期から年代を逐つて私鈔を試みようと思ふのは、つまりこの隠微な詩精神の展開を跡づけて見たいからに他ならない。僕は実証のため、気長さの修養をしようと思ふ。

(「プーシキン私鈔」『四季』昭和12年5月)

ここでいう「気長さ」とは、とりもなおさず「散文精神」であり、それをもってプーシキンの《詩精神の展開を跡づけて見たい》というのは、先の旧左翼の課題としての散文精神論と、仏文学徒らのアラン・ブームとの両方を消化している発言とみてよいであろう。そして同じ頃彼は、例の改造社版『プーシキン全集』に携わっている。しかも『全集』で神西が担当した作品は、「ボルジノの秋」の時期に関わるものが多い。

昭和14年(1939)5月、岩波文庫は『スペードの女王』の内容を改訂して、『スペードの女王・ベールキン物語』としている。事情は未詳だが、未完作品である「ピョートル大帝の黒奴」を収録している意味が、おそらく読者にはわかりづらいという判断から、同じく「ボルジノの秋」の成果である「ベールキン物語」に変更したのであろうか。

同書の解説で、新たに加わった「ベールキン」について、神西は次のように書いている。

さらにプーシキンは、成熟の余勢を駆つて散文の世界へ降りて行つて、人間の日常性のうちに新鮮な感興を求めようとした。その成果が『ベールキン物語』であつて、これはロシア文学最初の小説的なものの探求となつたのである。⁽²⁵⁾

ここで注目すべきは、それまで彼の言葉にはなかった《小説的》^{ロマネスク}という語が用いられていることである。「ロマネスク」といえば、シャルドンヌが思い浮かぶが、この年の初め、まさに彼は雑誌『文体』に、シャルドンヌの『愛をめぐる随想』を訳載している(1月・2月)。問題意識の在り処が、奈辺にあるかが、ここにうかがえるだろう。

ところで「ロマネスク」romanesqueとは、難しい語だが、『愛をめぐる随想』の翻訳で神西

は、この語に《非現実^{ロマネスク}》や《夢みる人^{ロマネスク}》などという訳を施している。これに先の《小説的^{ロマネスク}》を加えると、「散文」とはいかなるものであるべきかというイメージが、彼の中ではほぼ明確になっていたことがわかる。

もともとプーシキンの散文について、『修辭学的な抑揚から奇蹟的に免れてゐる』（「プーシキンの精神」）という理解をしていたところに、「ロマネスク」なものであるという評価が加わることで、『人間の日常性のうちに新鮮な感興を求めよう』とする表現というプーシキン散文の姿が見えてくるのである。

6 むすびにかえて

昭和14年（1939）より、神西は東亜研究所に勤務し、ソ連情報の蒐集活動に携わる。戦時色が濃くなるにつれ、執筆活動はしだいに停滞してゆくが、昭和18年（1943）、かろうじて文化事業をつづけていたYMCAで、市民向けにロシア文学の講座を一年間任される。おそらくそれが刺激になったのであろう、日記をみるとこの年の半ばに、プーシキン伝の執筆を目論む意向が芽生えたことが記されている。

6月9日（水）曇天。夜、水道橋舞台に六平太の「経政」、万三郎の「鷺」を観る。前者、美しきこと限りなし。狂言「川上」の悲劇性をめづらしく感ず。終演後、河盛、堀とマイネ、クライネに赴き時余にわたりて清談。初夏の夜の爽かさを感じたり。プーシキン起稿の意動く。⁽²⁶⁾

だが、やがて戦局が厳しくなり、本土空襲も増えてくると、死の予感に苛まれるようになったのだろうか、昭和19年（1944）初めの項には、次のように書かれている。

1月14日（金）快晴。終日多忙。参謀本部より囑託賞与を届けらる。夜台町に家居。まず「プーシキン伝」を以て小手慣らしをすること。小説によって身を立てざるうちは死ねない。死にきれない。⁽²⁷⁾

結局このプーシキン伝執筆は実現しないのだが、先に見たように、敗戦を機に文筆家として自立し、プーシキンに関する研究は、『プーシキン遺珠』『プーシキン短篇集』『莊園ものがたり』という、三冊の翻訳書の解説というかたちで結実するのである。それも昭和14年（1939）に一応の定見をきずいたところを土台とし、数年の雌伏期間に温めてきた見解をもって、戦後の時勢と対峙するだけの武器に磨き上げられて。

すなわち、それら戦後に出版されたプーシキン本および解説は、神西清の「散文精神」が培った、日本文章論として読みうるのではないだろうか。

※本稿執筆にあたり、佐藤繁好編『日本のプーシキン書誌（翻訳・紹介・研究文献目録）』（ナウカ株式会社、1999年12月）、石内徹編『人物書誌大系23 神西清』（日本アソシエーツ、1991

年6月)を大いに参考にしたことを謝して記す。

注

- (1) 小林実「近代日本のプーシキン受容史素描」(『世界文学総合目録』第十巻、大空社・ナダ出版センター、2012年12月所収)。
- (2) 木村浩『ロシアの美的世界』岩波書店(同時代ライブラリー 127)、1992年10月、pp.39-40。
- (3) 《There is in England no complete translation of Pushkin. This is much the same as though there were in Russia no complete translation of Shakespeare or Milton, but I do not mean that Pushkin is as great a poet as Shakespeare or Milton, but I do mean that he is the most national and the most important of all Russian writers.》BARING, Maurice *An Outline of Russian Literature*. 1914. Copied by Novinka Books, New York. 2006. p.viiより小林訳。
- (4) 『神西清全集』第五巻、文治堂書店、1984年7月、p.642。
- (5) 石内徹編『人物書誌大系23 神西清』日本アソシエーツ、1991年6月、p.13。
- (6) 『プーシキン遺珠』創藝社、1947年12月、pp.214-215。
- (7) 『プーシキン遺珠』p.135。
- (8) 『プーシキン短篇集』角川書店、1948年4月、pp.223-224。
- (9) 『莊園ものがたり』世界文学社、1948年4月、p.237。
- (10) いずれも『莊園ものがたり』p.240。
- (11) 神西自身は《この度は思ふ所あつて試みに『俠盗記』と題してみた。》(『俠盗記』「あとがき」p.242)としか述べていない。
- (12) 『神西清全集』第六巻、文治堂書店、1987年7月、p.11。
- (13) 『神西清全集』第六巻、p.13。
- (14) 『神西清全集』第六巻、p.16。
- (15) 『神西清全集』第六巻、pp.18-19。
- (16) 『ロマネスク』青磁社、1946年10月、p.253。
- (17) 『神西清全集』第六巻、p.22。
- (18) 『神西清全集』第六巻、p.27。
- (19) 『神西清全集』第六巻、p.27。
- (20) 『神西清全集』第六巻、p.27。
- (21) 『日本近代文学大事典』第四巻、講談社、一九七七年11月、p.164。
- (22) 桑原武夫「高邁の哲人アラン」(『世界の名著66 アラン ヴァレリー』中央公論社、1980年3月所収、p.8)
- (23) 『神西清全集』第五巻、pp.233-234。
- (24) 「解題」『スベードの女王 他一篇』岩波文庫、1933年8月、pp.121-122。
- (25) 『神西清全集』第五巻、pp.259-260。
- (26) 前掲、石井編p.37。
- (27) 前掲、石井編p.53。

